娘めぐみへの思い詠む

横田早紀江さんの短歌6首

きょうから県庁で展示

北朝鮮による拉致被害者の写真などを展示する「拉致問題パネル展」が10～16日、県庁1階県民ホールで開かれる。13歳の時に拉致された横田めぐみさんへの思いを込めて、母・早紀江さん(80)が詠んだ直筆の短歌6首が初めて展示される。

短歌は、新潟市立寄居中1年だっためぐみさんが1977年11月15日、北朝鮮に拉致された後、早紀江さんが折に触れて詠んだものだ。早紀江さんの著書「めぐみ、お母さんがきっと助けてあげる」の中で取り上げられている。

〈消えし子よ　残せるサボテン花咲けり　かく小さくも生きよと願う〉

めぐみさんが修学旅行の土産で買ったサボテンに、赤い小さな花が一輪だけ咲いた。小さくても、寒い新潟でも花が咲いたことに早紀江さんは心を打たれた。

「めぐみも絶対に生きている」。その願いを込めて短歌を詠んだ。「娘がいなくなり、『死にたい、死にたい』という思いの中で、不思議と歌が出てきた」と振り返る。

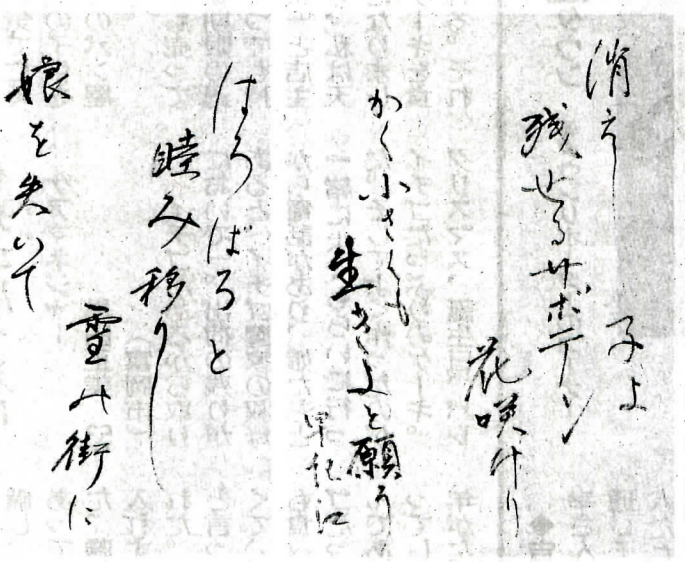
ほかにも、広島県から夫・滋さん(84)の転勤で、夢を持って新潟に移り住んだにもかかわらず、まな娘を失った悲しみを表した短歌などが展示される。

パネル展は毎年、北朝鮮人権侵害問題啓発週間(10～16日)に合わせて、県と「救う会・群馬　群馬ボランティアの会」などが開催している。同会事務局長の大野敏雄さん(80)が親交のある早紀江さんに頼んで、パネル展のために、6首の短歌を紙に書いてもらった。

同会の運営を担ってきた大野さんと妻・トシ江さん(83)は、体調不良などの理由から一時、会を解散することを考えた。早紀江さんに伝えた際に、送られてきたはがきも展示する。はがきには、解決の兆しが見えない拉致問題に対するいら立ちや、政府への憤りなどがつづられている。

大野さんは「高齢化する横田さん夫妻の現状や、悲しみに暮れる当時の早紀江さんの心境が伝わるパネル展だと思う。多くの方に足を運んでもらい、問題解決に向けて力を貸してほしい」と訴える。

午前9時～午後6時(16日は午後3時まで)。入場無料。問い合わせは県健康福祉課(027・226・2518)へ。



㊧めぐみさんが修学旅行の土産に買ってきたサボテンに花が咲き、「めぐみも絶対に生きている」と願いを込めて詠んだ短歌㊨家族で広島から新潟に移り住み、突然娘を失った悲しみを詠んだ短歌（ともに大野さん提供）